



式年遷宮と人材育成

井上 俊雄 一般社団法人
日本エレクトロヒートセンター 理事

式年遷宮の「式年」とは定められた年を意味し、「遷宮」とは神社の本殿を修繕するときなどに祭神を遷すことである。つまり定期的に祭神を遷すことが式年遷宮であり、昨年（2013年）10月に伊勢神宮で式年遷宮の遷御の儀が行われたことは記憶に新しい。20年毎の式年に内宮・外宮の正宮や別宮などの建物が造り替えられ、また、内宮・外宮や別宮の神宝・装束も全て一新された。式年毎に繰返し再生することで伊勢神宮の常若の精神を式年遷宮は象徴していると言われている。

京都の上賀茂神社でも式年遷宮が行われていることをご存知だろうか。私は京都方面へ週末に出張があった際の翌日は京都市内の神社仏閣を訪ねることを楽しみにしている。今年1月下旬の出張の際には地下鉄、バスを乗り継いで上賀茂神社に参拝した。その時に式年遷宮のことを初めて知った。

バスを降りてから上賀茂神社の広い境内を一ノ鳥居、二ノ鳥居を通して本殿の方向に進んでいくと「国宝・本殿特別参拝」の札の文字が目がとまり、早速、社務所で参拝を申し込んだ。その特別参拝では神職から、お祓い用の首掛けを戴いた後、説明を受けながら国宝である本殿、権殿（ごんでん）の外観を拝観した。権殿は本殿と同じ形・大きさの建物で本殿のすぐ左隣（西側）にある。祭神を祀る本殿と常設の仮殿である権殿が東西に並び建つのは上賀茂神社の特徴の一つである。

権殿は本殿が普段とは違う状況において神儀を遷す御殿で、調度品まで本殿に準じている。その普段とは違う状況の代表例が21年毎に社殿を新しくする式年遷宮である。それを来年10月に控え、新聞報道等によると今月6月中旬には修理に入る本殿から、隣にある権殿に祭神を遷す仮遷宮の儀式が行われた。上賀茂神社では社殿の多くが国宝や重要文化財に指定されているので建物の造り替えはできず代わりに屋根を葺き替える。

何故、式年が20年毎（または21年毎）なのかに関しては諸説があるようで、その一つに「社殿を造営する宮大工、神宝・装束を新調する工匠などの人材を育成して伝統技術を次世代に継承するには20年が適当」の説がある。次世代への継承について、我が国の電気事業の電力技術に関しては、これまでの高度経済成長による電力需要増加の時代には電力設備の新增設を通じて新しい電力技術が発展してきたが、これからの経済成長と電力需要増加の鈍化の時代では電力技術は継承が必要な伝統技術的な色が濃くなっていく。最近の新聞記事等によると、電気事業に関わる各事業者ともに電力技術の人材育成・技術継承が課題になりつつあり対策が検討されている。

私は電気事業の研究機関で電力系統の解析・制御分野の研究開発に長年従事してきた。その研究機関の創設者である松永安左エ門が「産業研究は知徳の練磨であり、もって社会に貢献すべきである」とのメッセージを遺されている。私の研究分野では社会に役立つ専門性の高い研究者を育てるには少なくとも15年はかかると実感している。人材育成に必要な年数を式年と考えると私の分野の式年は15年くらいが適当と思われる。式年遷宮の制度を作り上げた先人にならって電気事業の研究機関における産業研究者の人材育成の仕組みを私なりに考えていきたい。

(いのうえ としお) 一般財団法人 電力中央研究所 システム技術研究所 研究参事 システム技術研究所長